

‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις· ὁ βίος, ὑπόληψις.’

93号 1995.1.10

文・編集・発行

恋 怪子

LIVE: LENINGRAD COWBOYS

1994.8.7
渋谷クラブ・クアトロ



メンバー10人とダンスのオネェさん2人

4年前にはじめて“LENINGRAD COWBOYS GO AMERICA”という映画を観ていっぺんにファンになって映画館にかかるたびに観にいった、映画をウォークマンで録音までした。その2年後に出たCD“WE CUM FROM BROOKLYN”を聴いてLENINGRAD COWBOYSが映画で観たのよりもっとすごいバンドだとわかってずーっとライブを観たいって熱望していた。日本に来ると知ったときとうれしさといったら！ライブはCDよりもっともっとすごかった。LENINGRAD COWBOYSは聴く者を楽しませることにかけては世界一のロックンロールバンドだ。すばらしい演奏（オリジナルもカバーも全部自分たちのものになっている）と楽しいパフォーマンス（ステージ上のメンバー10人全員が必ず何かをやっている、何もやっていないということがない）であそこまで楽しませてくれる人たちが、いまこの世に実在して、5mと離れていない目の前でこれでもかこれでもかとロックンロールをやっている。「生きてよかった」ということを超えた美しい夜を堪能しきった。今まで生きてきたなかでは最高に楽しい出会いだった。

楽しさの究極は悲哀に通じる。あまりにも、あまりにも楽しいと、かえって死とか別れを強烈に突感するからだろう。この日聴いた“THOSE WERE THE DAYS”は涙がとまらなかった。どうしてなのだろうかと、あとでCDの歌詞カードを読み直してみたら、その理由がまっすぐにわかった。この歌の最後の部分“oh my friend, we're older but no wiser/For in our hearts/The dreams are still the same”（友よ、私たちは年をとってもすこしも利口にならない/なぜなら心の中の夢は今もおなじだから）というところ。まさに。私も“I'm older but no wiser/For in my heart/The dreams are still the same”である。いくら年をとってもちっとも利口にならない。でも、だからこそLENINGRAD COWBOYSに出会えたのだし、これからも出会い続けられるだろう。夢をもち続けられれば…。

この日のライブで最後の曲をやっているときに、客席の後ろから革ジャンを着た太った男が観客をおしのけて前のほうに突っ込んでいった。そのすぐあとからビデオカメラをかついだ男が2、3人ついていく。まわりから「マツムラだ」という声があがった。芸能人の松村ナントカらしい。LENINGRAD COWBOYSのメンバーたちも、ステージ前でどうにかやっているらしい様子にすこし気をとられたみたいだったが演奏は続いていたので、私はすぐにそんな騒ぎを忘れてステージにひきつけられた。ライブが終わり、人が殺到する前に出口を出て階段を降りていくと、女の子が一人「ムカツクーツ」といながら階段をかけ降りていった。下の道路に出ると、その女の子が松村ナントカに乗った大型バス（番組のロケバスか何か）に向かって「あんな終わり方じゃなかったはずなんだ。今日しか来れない野に。金返せよー」とどなっている。その松村ナントカはバスの窓のカーテンをチョロッと開けて情けない顔で何もいわず、すぐにカーテンを閉めた。女の子はよほど腹にすえかねたとみえて、ブーツでバスを蹴つとばしている。すると、バスからプロレスラーみたいな体格の人相の悪いゴロツキみたいな男が出てきて、「なにやっつてんだよー」とすごんで、女の子が蹴つとばしたあたりを指さして「オマエ、ベンションしろ！」。女の子は負けずに「なら、金返せよ。あんな終わり方じゃなかったはずなんだから」といいかえす。ゴロツキは「カンケーね！」といってバスに乗り込み、バスは走り去った。それから30分くらいいてクアトロの観客がほとんど帰った頃、LENINGRAD COWBOYSのメンバーたちが次々に出てきた。私には前日も、ライブにはいかなかったが外でメンバーたちが出てくるのを待っていたのだが、滞在していたホテルがクアトロの近くだったらしく、みんなステージ衣裳のまま、あのトンガリ頭にトンガリブーツでホテルの方へ歩いていく。待っていた十数人のファンがまわりをとりかこんで、写真を撮ったり、サインをもらったり、髪の毛やブーツをさわらせてもらっているファンもいた。カメラを向けるとはずしていたサングラスをかけなおしてポーズをきめてくれるし、みんな快くファンの求めに応じていた。メンバーもスタッフもみんな優しい目をしたもの静かな人たちだった。この日もステージでたっぷり2時間、観客をあんなに楽しませ幸せな気分してくれたうえに、前日とおなじようにみんな優しい笑顔でもの静かにファンと対応していた。それにひきかえ、あの松村ナントカたちの下劣さ。芸もなければ能もない。人を楽しませるんじゃないくて、自分たちがわるよぶげをしてはしゃいでいるだけ。人相が悪くなるはずだ。

CD:「HAPPY TOGETHER」(輸入盤)



しばらく前にやっつ輸入盤の「HAPPY TOGETHER」を手に入れた。ジャケットの中味も日本盤とまったくちがって、LENINGRAD COWBOYSにぴったりの楽しい「おふざけ」が満載されている。例えば「A VERYNORMAL INTERVIEW」はどこかNORMALなんだ？って感じだし、「FASHION & MORE」にはあの髪形するには伸ばすのに最低2年かかり、朝晩魚の脂でかためること、もしうまくかたまらなかつたら魚の骨を使えばいいとか、ORIGINAL LENINGRAD COWBOYS SHOESはヘルシンキとセント・ペテルスブルグ（旧レニングラード）でしか製造されていないとか、などなど。

а ВЕЩАЮ ИЮНЬЮА ИТЕРВЬЮ

What Happens When a Reporter Meets a Leningrad Cowboy?
INTERVIEW WITH THE ST. PETERSBURG, RUSSIA BAND THE LENINGRAD COWBOYS AND THE ALEXANDROV NA ZEMLE ENSEMBLE.
BY JAMES HARRISON
PHOTOGRAPHY BY JAMES HARRISON
ILLUSTRATION BY JAMES HARRISON

Wanted!

Do you Missions has some missing?
Please help!
If found, please call 0946377
Savved 200, Rubel.
Dead or alive.

FASHION & MORE

The Leningrad Cowboys' "Fashion & More" is a collection of...
The Leningrad Cowboys' "Fashion & More" is a collection of...
The Leningrad Cowboys' "Fashion & More" is a collection of...

新聞に登場したLENINGRAD COWBOYS

1994年8月23日 [日本経済新聞(7月)]

音楽で東西の境取り払う

左からベモ、ヨルマ、マト

5/12 ナケット発売開始!!。早朝から並んでナケット購入。
6/25 ニューアルバム「HAPPY TOGETHER」(日本盤)購入。
7/7 23日からの10-11ショーにさきあげ「レニクラ3集」というイベントで「LENINGRAD COWBOYS III! MOSIS」を観る。同時上映のライブ映画「IOIAL BAI ALAIKRA SHOW」(12)を観た。
8/4 クアトロでライブを観る。
8/5 クアトロでライブを観る。その後10-11ショーで「IOIAL BAI ALAIKRA SHOW」を観る。
8/6 MAVIでミニ・ライブを観た後、メンバーたちの舞台挨拶のある10-11「LENINGRAD COWBOYS III! MOSIS」を観る。この日はライブにはいらず、夜クアトロの演でメンバーたちが出てくるのを待つ。ちよと基もできてラッキー!
8/7 クアトロでライブを観る。3日とも劇場時間まで冷房のとこない階段にならなくてよかった。ライブの後、メンバーたちが出てくるのを待ってグオーカルのヨルマとマトにCDのジャケットにサインをしてもらう。肩をしてくれたヨルマの深いおだやかな目が印象的だった。
8/11 ナケットでライブを観る。ライブ前にメンバーたちがTシャツにジーンズ姿(髪はたっていない)ナケットの直ぐを歩いてた。ライブの前座の東京スカパライズ・オーケストラの演奏がつまらなくて閉口した。
8/29 「IOIAL BAI ALAIKRA SHOW」を観る。
9/1 「IOIAL BAI ALAIKRA SHOW」を観る。
9/2 「IOIAL BAI ALAIKRA SHOW」を観る。この日は5月11日

去年の夏のあの猛暑、熱風の中でLENINGRAD COWBOYSを追いかけまわった。
3月に再来日決定!!
3/3, 3/4 リキッドルーム
3/6 厚生年金会館